やっと日の目 鷗外の足跡

旧東独体制下で埋もれ…

「舞姫」などドイツ三部作で知られる明治の文豪、森鷗外が旧東ドイツで〝再発見〟されている。ドイツで学び、ドイツを愛した鷗外の足跡は、旧共産主義体制下では埋もれたままだった。東西ドイツ統一後、十数年を経て、ようやく文豪の足跡が掘り起こされる時を迎えた。（ドイツ東部デーベンで、三浦耕喜、写真も）

若き日の頭像置く

鷗外が二日間を過ごした城に、先月、若き日の文豪の頭像がお目見えした。ドイツ東部ライプチヒ近郊の町デーベン。城は鷗外も見下ろしたムルデ川の崖（がけ）の上にあった。

城を所有・管理するドロータ・フォン・ペロウさん(四三)が言う。「鷗外が来た二十三歳の時の顔をイメージしました。鷗外の心に迫るべく、制作者には鷗外の作品や日記を読み込んでもらいました。納得いかず、つくり直してもらったこともあります」

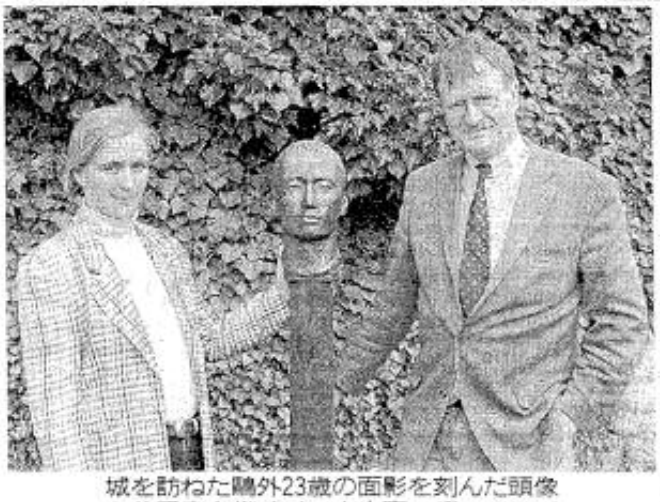
鷗外が城を訪れたのは一八八五年九月五日のこと。軍医としてドイツに留学していた鷗外は、付近で行われたドイツ軍の演習を視察。その時の宿舎がデーベン城だった。ここでの体験をヒントに、書き上げたのがドイツ三部作のひとつ「文づかひ」だ。

その一節にはこうある。「しろ木槿（もくげ）の花咲きみだれたる奥に、白堊（しらつち）塗りたる瓦葺（かわらぶき）の高どのあり」。だが、現在のデーベン城に白亜の館はない。一九七二年に東独によって爆破されてしまったからだ。

「文づかひ」舞台の城

没収、爆破の果て再興

鷗外を迎えた伯爵家が城で代を重ねたのも、第二次世界大戦でドイツが敗北するまで。旧ソ連軍の占領下で、城は東から逃れたドイツ難民であふれた。やがて、城は貴族を目の敵にする共産政権に没収され、伯爵家の家族は手荷物だけで西側に逃れた。その後、資材置き場となったが城は朽ちるままに放置された。ついに屋根が抜け落ち、東独政府は城を爆破処理した。


城を訪ねた鷗外23歳の面影を刻んだ頭像と伯爵家を継ぐペロウ夫妻＝デーベンで

秘密警察の監視も

鷗外をしのぶよすがなど残るはずもない。七〇年代後半になって、日本の個人研究家が鷗外の足跡をたどり、リポートにまとめ、地元の古老に送った。だが、それすらも秘密警察の監視対象となり、西側の外国人と接触したとして、取り調べを受けたという。

九〇年の東西統一後も、鷗外の足跡が表に出るには時間を要した。半世紀の間に直系の伯爵家は断絶。遠縁にあたるペロウさんの夫ラペルトゥスさん(四七)が相続したが、城の所有権を完全に取り戻すために買い取りを求められた。「奪った上に爆破したものを購入しろとは、明らかな不正ですが、結局二千三万ポルク（当時約二千三百万円）で、買わざるを得ませんでした」と言う。

「先祖が有名とは」

鷗外の話を聞いたのも東西統一後。現在は眼科医のラペルトゥスさんは「先祖が日本で有名だったとはびっくりしました」と話す。城に移り住んで十四年。もはや往年の栄華を取り戻すことは難しいが、少しずつ城内を整備。鷗外の投宿を含めた城の歴史を本にまとめ、先月二十二日には駐ベルリンの高野紀元・大使を招き、頭像の除幕式を行うに至った。

鷗外の足跡は、城の郊外でも復活している。城から北東約十キロ、「文づかひ」にも名の出てくる町ムッチェンでも昨年九月、鷗外が同時期に五泊した民家の跡に記念プレートが掲げられた。

さらに、近くにある郷土資料館には、鷗外の常設展示場がある。展示場を管理するパーテルさんは「鷗外の日記には、雷におびえた子どもを村まで送り届けた話もあります。短い間でも、さまざまな親交を結んだのでしょう」と話している。

ローカルニュース　世界編

モスク破壊で環境論争

カイロにあるイスラム教スンニ派の最高学府・アズハルの総長タンタウィ師が、礼拝所（モスク）の破壊を認める宗教令を出したことから、大論争となっている。

タンタウィ師は、ナイル川や支流に隣接するモスクからの排水が水質を汚染しているとして、取り壊しを認めた。当然、ほかの聖職者らは猛反発。「破壊を呼びかける代わりに、政府に水質浄化施設の建設を求めるべきだ」「聖職者の役割はモスクを守り、新たに建設していくこと」「何の問題解決にもならない」…。

教義上、極めて重要な「公共の福祉」に関する場合に限り、モスクの取り壊しが認められるという。河川に面したモスクはエジプト全土に約五百施設あり、かたずをのんで論争の行方を見守っている。

（カイロ・萩文明）